

学びの源泉 三谷 宏治

第2号 SFが教えるヒトの本質（後編）

私がこれまでに読んだ数百冊のSFのなかでのベストは、夢枕獏の「上弦の月を喰べる獅子」だ。そのテーマは将にヒトの本質的問いと言える。それは「ヒトは幸せになれるのか」だ。

そこでは3つの物語が並行して進んでいく。海から山へと登りながら魚から真人へと自ら変容する存在の謎に満ちた旅、若き日の宮沢賢治の苦悩、そして禅問答。

「良い問いは答えを含んでいる」と物語は教えてくれる。正しく問う力こそが大切なのだと。

このSFをとっても私の筆力では紹介し得ない。それはつまり、この本質的問いと答えを、私は私のものにしていないということなのだろう。

SFの最後に光瀬龍の「百億の昼と千億の夜」を紹介しよう。登場人物(?)はゴータマ・シッダールタ(仏陀の若い頃の名前)や阿修羅、キリスト、帝釈天などだ。舞台は過去から未来の数百億年にわたるこの宇宙全体だ。

シッダールタは問う。「なぜ、神は滅びと、そしてその後の救済を預言する」「全能と言いながら、なぜ滅びの前に救わないのか」と。確かに、多くの宗教はこの世の滅びを預言している。仏教では、56億7千万年後が滅びの時だ。その時、^{みろく}弥勒菩薩(今は^{によらい}如来になるべく^{とそつてん}兜卒天で修行中)が如来(仏)となって現れ、人々を救うと説く。キリスト教も、全ての魂は、最後の審判で裁かれ神による千年王国が始まる、つまり、今の世は滅ぶのだと言う。

神というものはかくも冷たい。

光瀬龍は我々に、あるSF的答えを用意はしているが、物語の価値はその答え自体にはなく(もちろん十分面白いが)、こういった根源的な問いとそれ

を問い続ける姿勢(物語の主人公達の挑戦と苦悩)にこそある。神すらを問う、それを哲学と普通は言うのだろうが、その意味ではよいSFはよい哲学の書と言えるだろう。

SFと同じく、様々な科学書(正確には科学啓蒙書)から学べるインサイトも多い。その一つを紹介しよう。

「大絶滅 Extinction」は異色の古生物学者 D. M. ラウプによって書かれた、地球生物 大絶滅の歴史だ。現在、地球生物学上5つの大絶滅が知られている。

- ・オルドビス紀末 (4.4 億年前)の大絶滅
- ・デボン紀末 (3.6 億年前)の大絶滅
- ・ペルム紀末 (2.5 億年)の大絶滅
- ・三畳紀末 (2.1 億年前)の大絶滅
- ・白亜紀末 (6500 万年前)の大絶滅

最新の白亜紀末ものが、いわゆる恐竜の絶滅と同じものだが、この時よりももっと深刻な絶滅を生物は繰り返してきている。デボン紀末のものでは生物種の9割以上が絶滅した。個体レベルで言えば全生命体の99%以上が滅んだという徹底的な絶滅だ。この地球に歴史上存在した生物種の殆ど全て(99.99%以上)は既に絶滅してしまっているのだ。統計的に見れば、生物種の本質は「絶滅」とも言える。

書中でラウプが示す、真理がある。

もし、あなたがカジノでコイントスゲームをやったら、どちらが勝つだろうか? 表裏の確率は完全に50対50。この条件で、果たして親が勝つか、子(あ

なた)が勝つか。

これは次回への宿題とする。トンチでも何でもなく、明確な理由があり、勝敗がある。そしてそれは生物という存在の本質でもある。

科学書からもう一つ。

全球凍結仮説というものをご存じだろうか。最近、NHKの特集番組「地球大進化」でも取り上げられたものだが、地球が22億年前と6億年前の2回、全面的に凍結した(つまり、全てを雪と氷で覆われた、^{スノーボール}雪玉になってしまった)というものだ。

「スノーボールアース」にはその学説が意味するところとともに、その学説がどう生まれ、叩かれ、磨かれて来たかの闘争史が詳述されている。

この本の面白さはそこにある。斬新で本質的な仮説が、常識の徹底的な抵抗に遭い、それを乗り越えていく痛快さだ。同時に、如何に強烈な個性とパワーが、常識破壊には必要かが描かれているとも言える。

地球が全面的に長期、凍結してしまったことがある、という説は、それまでの常識ではありえないものだった。理由は簡単。

1. もし全球凍結が起こると、太陽からの光と熱を殆ど反射し、ますます気温が下がってしまう。すると永遠に雪玉のままのはずだが、今そうではないから、過去そんなことが起こってはいない。
2. もし全球凍結が起こると、気温がマイナス100度にもなり海面も全て数十メートルの氷で覆われ海中は暗黒となる。生命は(植物プランクトンであっても)そんな中を長期生き残れない。すると生命は全滅しているは

ずだが、今そうではないから、過去そんなことが起こったはずがない。

見てのとおり、今思えば「現在の状態」と「常識的論理」に縛られた思い込みだった。

大胆な仮説と詳細な分析は、雪玉からの復活を証明したし(その代わり一旦、灼熱地獄になるが・・・)、生命生き残りのオアシスの存在可能性を示した。

氷河や氷の下でしか生まれられない地層が、世界中にある。しかも当時赤道直下であった地域にも。それを徹底的に追究し、当時、その場所で何が起こったのかを純粋に考え抜いたものの勝利だった。今に縛られては、いけない。

入社一年目の冬、新入社員の私はあるプロジェクトで、一部上場企業の大企業役員(つまり60才以上)と「パーティでの歓談」をする羽目になる。その会社では、役員報告会の後に必ず立食パーティが催されたのだ。相手は役員15名。こちらはコンサルタントが数名。枯れ木も山の賑わい、若輩者の私も逃げるわけにはいかない。

「君なんて孫みたいなもんだねえ」と言われ(かわいがられ)ながら、ただ、兎に角話題がない。ゴルフもやらないし、田舎も違うし、困った困った。そこでなんと、読破してきた万巻のSFから得た「ヒトの本質」が私を救った。

ある役員が、そういったSF話を、たいそう面白がってくれたのだ。コミュニケーションの難しさ、進化の冷たさ・覚悟。そう言ったことは大企業という巨大で難解な生き物を扱う経営者達からも、意味のあるインサイトであったのだ。

ふと、中学の時の思考が甦る。「SFって無駄なんだろうな。」そんなことなかったよ、安心しな。

今でも、SF は月に何冊か必ず読んでいる。もちろん楽しみのためだが、私の思考の枠組み（＝制約）を拡げるための最大の武器だからでもある。

次号でも学びの源泉として本を取り上げる。題材は「歴史」だ。司馬遼、宮城谷から古代史ミステリーまで。

お楽しみに。

本リスト（1.2 回分とも）

SF

- ・ 2001 年宇宙の旅、アーサー・C. クラーク著、ハヤカワ文庫 SF
- ・ バーサーカー三部作（『皆殺し軍団』『赤方偏移の仮面』『星のオルフェ』）フレッド・セイバーヘーゲン 著、ハヤカワ SF 文庫
- ・ 戦闘妖精 雪風（改）、神林 長平 著、ハヤカワ文庫 JA
- ・ 百億の昼と千億の夜、光瀬 龍 著、ハヤカワ文庫 JA（萩尾 望都によるマンガ版もある、少年チャンピオン・コミックス）
- ・ コンタクト、カール・セーガン 著、新潮文庫
- ・ BRAIN VALLEY、瀬名 秀明 著（パラサイト・イヴの作者）、角川文庫
- ・ 地球幼年期の終わり、アーサー・C・クラーク 著、創元推理文庫
- ・ 上弦の月を喰べる獅子、夢枕獯 著、早川文庫 JA

科学書

- ・ 消えたイワシからの暗号、河井 智康 著、三五館
- ・ 大絶滅 Extinction、D. M. ラウプ、平河出版社
- ・ 法隆寺を支えた木、西岡常一・小原二郎 著、NHK ブックス
- ・ スノーボールアース、ガブリエル・ウォーカー 著、早川書房
- ・ 地球大進化 第 1 巻～第 6 巻、NHK「地球大進化」プロジェクト 編、NHK 出版
- ・ 美しくなければならぬ - 現代科学の偉大な方程式、グレアム・ファームロ 著、紀伊國屋書店

初出：CAREERINQ.COM 2005/03/04